令和5年度 戦争にまつわる体験記

今年度も9人の市民の方から体験記をお寄せいただきました。その内2編ご紹介いたします。

「平和への思いを届ける」

匿名希望（78歳）

私は昭和20年3月12日に、神戸市兵庫区で生まれました。生後5日目に、神戸市はB29爆撃機による大空襲を受けました。母は生まれたばかりの私をかたい座布団で支えて背負い、家の中の防空壕に入りなさいという近所の人たちの勧めもきかず走って逃げました。安全な所で私を降ろすと、私の顔の皮は剥がれてずるずるだったので、この子はもう助からないと思ったそうです。産後直ぐの身で逃げ回った母はもう疲労の極みに達しながらさまよい歩き、やっとのことで六甲の姉の家にたどり着きました。そばにいなかった父は3週間しても、私たちを見つけることができず、自分の家に掘った防空壕の中で亡くなった近所の人々と同じように死んでしまったと思ったそうです。

父は戦地でマラリアにかかり、内地に帰されました。その療養中に部隊が全滅したことを知り、自分だけが生きて帰ったことが申し訳ないとの思いから、終戦後も精神的な病を抱えることになり、時々発作がおきて現在の兵庫医大の精神科へ入退院を繰り返しました。母は近所の人に隠れて、まるで遊園地に行くかのように父と子どもたちを連れて病院に通いました。病院の精神科は鉄格子があってまるで刑務所のようだと、子どもながらに思いました。軍人恩給や生活保護も「生きて帰ってきたのだから申請するな」と言う父の考えで受けなかったため、我が家はいつも貧乏でした。部隊が全滅し自分だけが生きて帰ったことを何年たっても苦しんでいたのだと思います。

病気が落ち着いている時の父は戦争のことを一切口にしませんが、駅に手や足のない傷病兵がいると、いつも箱にお金をいれていました。病気で元の大企業にはもどれず、小さな町工場で病と闘いながら働き、母は実家の家具工場の手伝いや仕立物などの内職で家計を支えていました。父の病が完治するまで15年かかりました。今、私がこの年まで元気で生きていられるのは、母が必死で私を守ってくれたおかげだと思っています。

「戦争は人と人の殺し合い、絶対戦争はしてはいけない」とよく母は言っていました。私は母の思いを次の代につなげたいと思っています。

「自分で護った小さな生命」

山本　一惠 さん（87歳）

今年は戦後78年、あの悲惨な負け戦を直接言葉で語ることができるのは、私たちしかいない。聞き伝えでは物語になってしまう。当時、全国民がそれぞれに戦争を体験した。たとえ子どもであっても逃れることはできなかった。

私が生まれ育ったのは甲子園、当時は武庫郡鳴尾村と言い、全国で唯一の村立中学校（現、県立鳴尾高校）を有する裕福な村だった。甲子園球場をはじめ鳴尾競馬場、海水プールも備えた阪神パーク、甲子園ホテルなどの施設、苺摘みや芋掘り、潮干狩りや地引き網漁、海水浴や蛍狩りなどの楽しみ、電車も夏は透かしの車体と籐椅子に模様替えという風雅に恵まれた平和な田園地帯であった。

ところがその付近に川西航空機という工場があり、電車沿いの林の中にも飛行機を配置するなど、大空襲の標的となる条件も備えていた。このために終戦間際になって、『火垂るの墓』に描かれているような悲惨な大空襲を受けることになった。その前触れであろうか、艦載機が頻繁に飛来して来ていた。

昭和20年の夏、私は国民学校4年生だった。ほとんどの生徒は集団疎開か縁故疎開に行っていて、学校にはほんの少しの生徒しか残っていなかった。授業もほとんどなく、毎日、松の木運びや、馬糞拾い、兵舎（校舎の半分が兵舎になっていた）の掃除などをしていた。それでも一応勉強道具をランドセルに詰めて登校していた。その日も警報が鳴り、それぞれ家の方向別にまとまって急いで下校した。途中、私はつまずいて転んだ。その拍子にランドセルの中身が勢いよく道に飛び出した。慌ててそれらを拾い集めたが、みんなはずっと先を走っていて、やがて見えなくなった。私は自分の息遣いを聞きながら1人走っていた。やけに道が白かったのを覚えている。と、その時、目の前の道を黒い影が横切った。鳥？殺気を感じた瞬間、さっと旋回して戻ってきた艦載機からバリバリバリッ。私は訳も分からず逃げ回った。あたかも殺虫剤の噴射から逃げ惑うゴキブリのように。とっさに動物的感覚で、家の門前に架かっている石橋の下に潜り込んだ。その間も艦載機からの銃撃は続いた。付近の窓ガラスや屋根瓦が砕け散る音を、案外冷静に聞いていたような気がする。どうやら敵機が去ったらしく、付近の人達が被害状況を見届けるために出てきて、私を見つけた。私は無傷だったが腰が抜けて動けなかった。やがて警防団のおじさんに背負われて帰って来た私を見た母は「艦載機の機銃掃射があったのに、今まで何処をふらついていたの!?すごく心配したのに」とえらい剣幕。おじさんから説明を聞いて、今度は息苦しいほどきつく抱きしめられた。途端に力が抜けて大声で泣きじゃくった。いつまでもいつまでもそうしていた。

その後、8月5日の夜に大空襲を受け、家は跡形もなく焼け落ち、壕の中で母は火傷を負った。そして、その10日のちに終戦を迎えた。

全員の体験記は市のHPに掲載